

# 嵯峨の屋おむろ初期作品の成立および出版に関する考察

——『守銭奴の肚』『ひとよぎり』『美人の面影』『苦樂の鏡』——

三 川 智 央

1

嵯峨の屋おむろ（本名・矢崎鎮四郎、別号・北郎散子）は、今となつては、「専門家を別にすれば、知る人は稀であり、文学史にさえ、その名をとどめたり、とどめなかつたり、いつのまにか忘れられた存在となっている」<sup>①</sup>作家だが、明治二十年代の初頭においては、当時、第一線の批評家であつた石橋忍月が、「小説界の明治廿一年以前を春のや支配の時代ペリヤドとなし廿二年を北郎、美妙、紅葉支配の時代となさば明治廿三年は恐くは鷗外、露伴二氏支配の時代ならん」と評した<sup>②</sup>ように、山田美妙や尾崎紅葉と並び、明治二十二年の「小説界」をリードしたとされる人物であつた。また、嵯峨の屋は、二葉亭四迷（本名・長谷川辰之助）とは東京外国語学校以来の友人であり、二葉亭に連れられて坪内逍遙を訪ねたことがきっかけとなつて、彼は逍遙の下で作家としての活動をスタートさせてい

る。<sup>(5)</sup> こうしたことから見ても、嵯峨の屋おむろは、明治期、中でも明治二十年前後の小説の実態を明らかにする上では、見過ごすことのできない重要な存在であると言える。<sup>(6)</sup>

ところが、現在、嵯峨の屋は、人々から「忘れられた存在となっている」ばかりでなく、近代文学研究においてもまた、注目されることがほとんどない状況が続いている。ちなみに、一九七一年刊行の『明治文学全集17 二葉亭四迷・嵯峨の屋おむろ集』には、嵯峨の屋の小説は八編（『無味氣』『薄命のすゞ子』『初戀』『くされたまご』『野末の菊』『流轉』『夢現境』『世の中』）が収められているが、巻末の「解題」には、「二葉亭の諸作品が全集その他で容易に見ることができるとに對し、嵯峨の屋の作品は、昭和のはじめに改造社版及び春陽堂版文學全集でわずかに複製されたのみで、現在ではほとんど取り上げられていない。今回は資料的な面を考慮し、紙幅の許すかぎり、嵯峨の屋の主要な小説・評論等を収めるといふ、編集方針をとった」と、わざわざ記されている。<sup>(7)</sup> また、「明治文學全集」とほぼ同時期に刊行されていた「日本近代文学大系」では、嵯峨の屋の名を冠した巻は設けられず、彼の小説は、一九七〇年刊行の『日本近代文学大系47 明治短篇集』の中に、『初戀』一編が収められているのみである。<sup>(8)</sup>

このような状況にあって、彼の初期作品に至っては、そうした全集などに翻刻されるはずもなく、私たちが本文を確認できるのは、現在までかろうじて残っている明治期の刊本によってのみというのが実状である。しかも、嵯峨の屋の初期の小説は、近世の戯作の様相を色濃く残すものであったため、近代文学研究においては、作品そのものが研究対象から除外される傾向が続いてきたという経緯もある。過去の研究において、彼の初期作品がどのように評価されていたのか。主なものを引用すると、次のようになる。

嵯峨の屋の處女作は、明治二十年一月刊の『浮世人情 守錢奴之肚』と題するものである（中略）調子は三馬式な戯作で全篇ユウモアに富んだものであるが、その間に又一種云ふべからざるパセティックな味もあり、作家としての嵯峨の屋の天稟の一端が夙くここに現れてゐると云つてよい作である。次の作は『百人百感 美人の面影』で、これは明治二十年二月「大阪浪花新聞」に連載したものである。翌々廿二年三月、單行として公刊。（中略）その構想において、假名垣魯文の『安愚樂鍋』を偲ばせるものである。（中略）次の作は、同廿年の十二月に公刊された『ひとよぎり』である。（中略）これも三馬の例の『浮世風呂』などを偲ばせるものである。（中略）一種の探偵物式興味を喚起するところに、或る新味がないでもないが、餘りに落想的で全體として調子の低い戯作式臭味のものたるを免れない。

（本間久雄、一九四九年）

嵯峨の屋自記の年譜（改造社版現代日本文学全集）によれば、第一作は明治二十年一月刊行の「浮世人情 守錢奴之肚」である。ついで二十年二月に「百人百感 美人の面影」という作を浪花新聞に書いている。さらに同年十二月、「ひとよぎり」を刊行している。これらはいずれも未見であるが、戯作調の濃厚なものであると断じてよいようである。

（和田繁二郎、一九五九年）

逍遙の尽力で二十年正月「浮世人情 守錢奴之肚」を発表して世に出た。みずから三馬、一九の影響を受けた

というように、守銭奴三屋屋喜右衛門の珍妙な恋を通じて、浮世の人情をうがち、世相を諷刺したものである。これに次ぐ「百人百感 美人の面影」（『浪花新聞』20・2）、「ひとよぎり」（『金港堂単行20・12』）は未見であるが、本間久雄氏「明治文学史」下巻によれば、いずれも通俗的な戯作の域を出ないものという。

（十川信介、一九六七年）<sup>⑧</sup>

処女作は『守銭奴の肚』（明治二〇年一月刊）であり、逍遙の序を付して出た。吝嗇な質屋の主人が一ぱい食う話で、戯作調の凡作である。つづく第二作「ひとよ切」（明治二〇年二月）は、大晦日の一日におけるいろいろな職業の人の心情や生活を並べたてて、作意は西鶴の「胸算用」に似ているが、これまたあざとい愚作にすぎない。

（吉田精一、一九七〇年）<sup>⑩</sup>

習作期の彼の作品、『浮世人情 守銭奴之肚』（二〇・一）、「百人百感 美人の面影」（『浪花新聞』二〇・二）、『ひとよぎり』（二〇・一一）は、彼自身言うように、三馬、一九の影響が濃厚で、戯作の域を出ない（ただし「美人の面影」は未見。また逍遙『柿の帯』によれば、彼は『今日新聞』（一九・一〇）に「神經の罪」を逍遙の加筆で載せたというが、この作品はまだ確認されていない）。

（十川信介、一九七一年）<sup>⑪</sup>

二〇年一月処女作『浮世人情 守銭奴之肚』（大倉孫兵衛刊）を出版。一二月『ひとよぎり』（金港堂）を上梓

したが、いずれも戯作的で習作の域を出ない。

(杉崎俊夫、一九七七年)<sup>12</sup>

嵯峨の屋の初期作品として、『守銭奴の肚』『美人の面影』『ひとよぎり』といった題名があげられているが、いずれも「戯作の域を出ない」ものとして、片付けられてしまっていることがわかる。

だが、はたしてこれでよいのだろうか。たしかに、ここにあげられた嵯峨の屋の作品はどれも、戯作の影響から抜け出せていない作品なのかもしれない。しかし、そのことによって、近代文学としての価値がないと判断するのは、あまりにも拙速と言えないだろうか。近代文学としての小説というものがいまだはっきりとした形を成さずにいた当時、小説と戯作との間に明確な区別があるはずはなく、作品は混沌とした状態で存在していたはずである。むしろ、近世文学と近代文学の狭間にあって、いずれの領域からも等閑視されていたこのような作品にこそ、近世と近代をつなぐ手がかりが隠されているのではないか。

私は、以上のような問題意識から、嵯峨の屋おむろの初期作品に目を向けてみたいと考えている。しかし、ここに引用した過去の研究においても「未見」ということばがしばしば登場するように、彼の初期（明治二十年前後）の作品は、その発表紙面や刊本自体が残されていないか、残されていたとしても希少であるため、容易に手にすることができない状況にある。先ほど述べたように、全集などへの翻刻もなされてはいない。従って、作品自体の成立や出版についてもはっきりとしない部分が多い。本稿では、嵯峨の屋の初期作品研究の前段階として、彼の初期作品の成立や出版に関して考察してみたい。

## 2

まず、先ほど引用した研究以降、嵯峨の屋の初期作品を扱った研究が二件あるので、先行研究として、その内容を確認することにする。

一件目は、一九七九年に発表された論文、高田知波「嵯峨のやおむろの作家的出発——『無味気』の前後——」<sup>14</sup>である。この論文の中で高田は、「嵯峨のやの第一期」に関するそれまでの研究を概観した後、「作品のひとつひとつに即しての精細な考究はいまだなされていないというのが現状である」と指摘し、嵯峨の屋の初期作品についての本格的な整理と考察を行った。論文の一部を引用する。

この期に属する作品としては『守銭奴之肚』『美人の面影』『ひとよぎり』の三作を挙げるのが常になっているが、ここにもうひとつ、明治二十二年（一八八九）三月に上梓された『苦楽の鏡』が加わる可能性について誰も指摘していないのは不思議なほどである。なぜなら、『苦楽の鏡』の内容と手法は（中略）『美人の面影』と同工である上に、明治二十二年三月三十一日に出版された『苦楽の鏡』と三月十九日に出版された『美人の面影』とを対照してみると、ともに大阪偉業館から出ている両著は本の型式から紙質にいたるまでほとんど完全に一致しているばかりか、奥付の著作者名が「香川倫三」という別人名義になっているところまで共通してい

るといふ事実があり、『美人の面影』の方が二年前（明治二十年）に大阪の『浪華新聞』に連載した小説の単行本化であることが嵯峨のや自身によって明らかにされている以上、『苦楽の鏡』もまた同じような経過を辿って上梓されたのではないかと推測が当然生まれてくるはずだからである。加えてこの両著共通の著作者名義人になっている香川倫三が『浪華新聞』創立スタッフのひとりとして同社内でも重要な地位を占めていた人物であることや、『苦楽の鏡』の自序の末尾が「（中略）今日より、白い紙を埋むるになん其外題は『二面苦楽の鏡』其為め口上左様といふ」（傍点引用者）となっていて、連載小説開始に先立つ作者口上の転記と推定されることなどを勘案すれば、『苦楽の鏡』が『美人の面影』とほぼ同じ頃に書かれた小説であり、より具体的には『浪華新聞』に連載されていたのではないかと考えてもそう見当違いではあるまいと私は思うのである。

ここで高田は、嵯峨の屋の初期作品として、明治二十二年三月三十一日に大阪偉業館から刊行された『苦楽の鏡』の存在を新たに指摘している。また、それを、明治二十年の『浪華新聞』連載後、明治二十二年三月十九日に大阪偉業館から出版された『美人の面影』の刊本と比較し、両者の刊行時期や刊本自体の共通点などから、この二作品はほぼ同じ頃に書かれ、いずれも『浪華新聞』に連載された後に刊行されたのではないかと推論している。<sup>15</sup>

過去の研究に加え、高田が新たに指摘した内容をまとめると、次のようになる。<sup>16</sup>

○（『神經の罪』明治一九年一〇月、『今日新聞』に掲載か？）

- 『守銭奴の肚』明治二〇年一月刊行。
- 『美人の面影』明治二〇年二月、『浪華新聞』に連載（未見）。↓明治二二年三月一九日、大阪偉業館より刊行。
- 『苦樂の鏡』（『浪華新聞』に連載か？）↓明治二二年三月三十一日、大阪偉業館より刊行。
- 『ひとよぎり』明治二〇年一二月、金港堂より刊行。

なお、高田は、同じ論文において、『守銭奴の肚』『美人の面影』『苦樂の鏡』『ひとよぎり』の内容についても考察を行い、『ひとよぎり』がこの四作品の中では最後に成立した作品であるという前提のもとに、「前三作が三馬流の旧戯作式『穿ち物』を土台にして逍遙の（中略）心理描写の主張を採り入れた『改良小説』のスタイルを素直に踏んでいるのに対し、『ひとよぎり』の方は（中略）逆にそのような創作態度と創作方法を嘲笑しようとする作者の意図が歴然として」ところに、この作品と前三作との最も基本的な相違が認められる」とし、『ひとよぎり』から、「少くとも明治二十年の前半までは逍遙の忠実な弟子として「人情」「世態」の活写に取り組んでいた嵯峨のやが、同年末にはそのような方法を根底的に否定する立場に移行しているという急速な変化があった」ことが読み取れると論じている。非常に興味深い論考だが、ここではひとまず、高田が『ひとよぎり』の成立をこの四作品の中で最後と考え、自説を展開していることを確認しておきたい。

二件目は、杉崎俊夫が、一九八五年に刊行した著書『嵯峨の屋おむる研究』<sup>17</sup>の第四章「戯作の残照——習作期——」で行った論究である。この中で杉崎は、嵯峨の屋の「習作期」の作品を『守銭奴の肚』『美人の面影』『苦



樂の鏡』『ひとよぎり』の四作とし、それぞれの刊本の書誌情報を明らかにするとともに、内容についても詳細な考察を行った。

それによると、実際の刊本を確認した上での書誌情報に関しては、従来の研究を裏付ける形となっており、特に目新しい提示はなされていない<sup>18</sup>。また、『苦樂の鏡』についても、高田の推論をふまえ、実物は確認されてはいないものの、「おそらくこの推定どおり、『美人乃面影』の連載に続いて『浪華新聞』に発表されたものと認定して誤りないものと思われる」とし、四作品の順を、高田と同じく、第一作『守錢奴の肚』、第二作『美人の面影』、第三作『苦樂の鏡』、第四作『ひとよぎり』としている。そして、おそらくこの作品順を前提として考察を行った上で、内容については、『守錢奴の肚』『美人の面影』『苦樂の鏡』の「三作は伝統戯作文学の絶対的影響下に、近代文学樹立線上の改良主義的な安易な方向にのみもたれかかっていた、いわば戯作的習作に過ぎず」、「戯作臭紛々たる彼の小説が、何等かの形で近代小説としての性格を具えるためには、作者その人の文学観が伝統戯作の線上にはなく、ロシア近代文学の方向において覚醒される必要があり、それにとまなう写実理論の再認識がなされなければならないのである」とする。一方、第四作の『ひとよぎり』については、「現実批判につながる（もちろん明確ではないが）批評精神の萌芽を認めることができるのではないか」として、この作品の中に、その後の彼の作品につながる近代文学的な要素が含まれていることを指摘している。『ひとよぎり』に、他の三作品とは異なる「批評精神」を読み取っている点では、先行する高田の意見とほぼ同じ見解と言ってよいだろう。

ただ、杉崎の論考で腑に落ちない部分の一つある。それは、『ひとよぎり』の成立時期についてである。彼は、

高田が先ほどの論文の中で『ひとよぎり』の成立時期を、刊本に掲載されている嵯峨の屋自身による「序」の日付を根拠として、明治二十年「十二月中ごろ」と考えたのに対し、それには「全面的には賛同しかねる」として、坪内逍遙の日記抄録「幾むかし」<sup>(19)</sup>の明治十九年十二月二十一日の記録に「金港堂へ嵯峨のやの稿を賣る」とあることを指摘し、それが「一年後の二十年十二月に発刊された『ひとよぎり』以外に考えられない」と論じる。だとすると、『ひとよぎり』は、この四作品の中でもかなり早い時点で成立していたことになり、杉崎が自説の展開で前提としていたと思われる作品順は崩れることになる。ところが杉崎はこの矛盾はそのままにし、最後に『ひとよぎり』は従来通り嵯峨の屋の第四作と認定しておきたい。嵯峨の屋はこの実験的な試みを経て漸次「戯作臭」を超克していくことになるのである」と結論づけてしまっているのである。

## 3

管見では、『嵯峨の屋おむろ研究』における杉崎の論考以降、嵯峨の屋の初期作品に関してくわしい検証を行った研究は見あたらない。<sup>(20)</sup>従って、嵯峨の屋の初期作品研究の現状は、『守銭奴の肚』『美人の面影』『苦樂の鏡』『ひとよぎり』の四作品の刊本が実際に確認され、その出版の状況や内容についての具体的な考察が行われ始めてはいないものの、各作品の評価の前提ともなる成立時期を含め、いまだ曖昧な点は多く残されているということになる。

こうした点を明らかにしていくため、まずはあらためて刊本の確認を行ってみたい。幸いにも現在は、『守銭奴

の肚』『美人の面影』『苦樂の鏡』『ひとよぎり』の刊本のすべてが、「国立国会図書館デジタルコレクション」(国立国会図書館所蔵)として、モノクロ画像ではあるがウェブ上で公開されている。また、『守銭奴の肚』については現物を手にすることができたので、これらを用いて作業を行った。その結果、確認できたデータは次のとおりである。

○『守銭奴の肚』

【体裁】四六判・洋装・背クロス(ボール表紙本)・一三〇頁【表紙】版權所有／浮世人情 守銭奴之肚 全／春乃屋主人補助／嵯峨の屋主人作(絵入り) 【扉】主人公之肖像(絵入り) 【序1】守銭奴の肚の序／一月初旬 春のや主人おぼろ 【序2】守銭奴の肚の序／明治二十年一月初旬 春のやのかゝりうど 嵯峨のやおむろ 【巻首】浮世人情 守銭奴の肚／春のや主人補助／嵯峨の家おむろ著 【本文】第一回〜第八回【挿絵】第一回・第四回・第五回・第七回に各見開き一枚(安達吟光) 【巻尾】浮世人情 守銭奴の肚／大尾【奥付】明治十九年十月廿二日板權免許／全二十年一月出版／著者 東京府士族 矢崎鎮四郎 神田區裏神保町五番地／出版人 全平民 大倉保五郎 日本橋區通一丁目十八番地／出版人 全士族 神戸甲子二郎 京橋區弓町十番地／發兌人 大倉孫兵衛 日本橋區通り一丁目十九番地【備考】国立国会図書館所蔵本には、〈序1〉の最初の頁の余白に「明治二十年二月廿八日内務省交付」の押印。〈奥付〉に「定価三十五錢」の押印。

## ○『美人の面影』

【体裁】四六判・(仮製本(くるみ表紙)か?)・六一頁【表紙】春乃屋おほろ補助／嵯峨のやおむろ著／美人乃面影 全／大阪 岡本書房發兌(絵無し)【扉】香川寶洲著／美人乃面影 全／大阪 偉業館發兌【序】百人百感 美人乃面影の序／春乃屋主人しるす【発端の巻首】美人の面影／發端／春のやおほろ補助／嵯峨のやおむろ稿【本文の巻首】美人の面影／春のや主人補助／さかのや御室稿【本文】第一回〜第十九回(ただし、第十五回と第十六回は逆順で掲載されている)【挿絵】なし【巻尾】美人の面影 終【広告】七頁分【奥付】明治廿二年三月十九日出版／同年三月二拾四日刷成／(上部に横書きで)版權所有／發行者 大坂東區唐物町四丁目十二番屋敷 岡本仙助／著作者 大坂北區眞砂町百廿七番屋敷 香川倫三／印刷者 大坂東區備後町五丁目廿四番屋敷 前田菊松／發賣者 大坂南區鹽町三丁目四番屋敷 岡本宇野／發賣者 大坂東區淡路町二丁目五十一番屋敷 北島長吉【備考】〈扉〉に「明治二二・四・一一・内交」の押印。

## ○『苦樂の鏡』

【体裁】四六判・(仮製本(くるみ表紙)か?)・六七頁【表紙】春の屋おほろ補助／嵯峨のやお室著述／苦樂の鏡(絵入り)【扉】春乃屋おほろ補助／嵯峨のやおむろ著／苦樂の鏡 全／大阪 偉業館發兌【序】両面苦樂の鏡／序(記名はないが自序と思われる)【巻首】両面 苦樂の鏡／春のやおほろ補助／嵯峨のやおむろ著【本文】第一回〜第十回【挿絵】なし【巻尾】両面 苦樂の鏡 終【奥付】明治二十二年三月三拾一日出版／同年三

月三拾一日刷成／日付の下に「版權登錄」と押印／（上部に横書きで）版權所有／發行者 大阪東區唐物町四丁目十二番屋敷 岡本仙助／著作者 大阪北區眞砂町百廿七番屋敷 香川倫三／印刷者 大坂北區堂島濱通二丁目百廿九番屋敷 小寺吉藏／發賣者 大阪南區鹽町三丁目四番屋敷 岡本宇野／發賣者 大阪東區淡路町二丁目五十一番屋敷 北島長吉【廣告】八百分【備考】〈扉〉に「明治二二・四・一八・内交」の押印。「序」の最後に、「今日より白い紙を埋むるになん其外題は「二面苦樂の鏡」其爲め口上左様といふ」とある。また、〈廣告〉の中に、「春のやおぼる主人補助／嵯峨のやおむる著述／美人の面影／洋裝美本 全壹冊／正價 金二十錢」とある。

○『ひとよぎり』

【体裁】四六判・仮製本（くるみ表紙）・八六頁【表紙】春の屋主人閨／嵯峨の屋おむる著／ひとよぎり／東京 金港堂藏（絵無し）【扉】春の屋主人閨／嵯峨の屋おむる著／ひとよぎり／東京 金港堂藏【序】ひとよぎり序／十二月中ごろ さかのやおむる識【口絵】見開き一枚（尾形月耕）【巻首】ひとよぎり／春のや主人閨／さかのや御室著【本文】回数分けなし【挿絵】見開き四枚（尾形月耕）【奥付】明治廿年十二月十五日版權免許／同十二月出版／著者 東京府士族 矢崎鎮四郎 神田區裏神保町五番地／出版人 東京府士族 原亮三郎 日本橋區本町三丁目十七番地／大賣捌 大阪北久寶寺町四丁目 金港堂原亮三郎支店／大賣捌 金港堂支店／各府縣代理大賣捌所【備考】〈扉〉に「明治二二・一・一一・内交」の押印。〈奥付〉に「原價金廿五錢」の押印。

以上のデータを見ると、『守銭奴の肚』『苦樂の鏡』『ひとよぎり』については、先行研究と矛盾する点はないようだが、『美人の面影』については、どうも表紙および扉の異なる異装本が存在することがわかった。というのは、前掲の杉崎俊夫『嵯峨の屋おむろ研究』には、『美人の面影』の表紙写真（モノクロ）が掲載されているのだが、その表紙は、この国立国会図書館所蔵本とは異なり、女性の上身の絵が描かれている上に、記載内容も「美人乃面影／春のやおぼろ補助／嵯峨のやおむろ著」となっている。杉崎はこれが「筆者架蔵の初版本」であるとし、「内題には「春のやおぼろ補助 嵯峨のやおむろ著」とある」と解説している。また一方で、高田知波は、前掲論文において、「表紙に記載された名義」は「春の屋おぼろ補助 嵯峨のやおむろ著」だとしている。この三種の刊本を仮に、高田本、杉崎本、国立国会図書館本とし、わかる範囲での相異点を示すと次のようになる。

## ○高田本

【表紙】春の屋おぼろ補助／嵯峨のやおむろ著（その他不明）【扉】（不明）

## ○杉崎本

【表紙】美人乃面影／春のやおぼろ補助／嵯峨のやおむろ著（絵入り）【扉】（杉崎の言う「内題」が扉のものであるとすれば）春のやおぼろ補助／嵯峨のやおむろ著（その他不明）

## ○国立国会図書館本

【表紙】春乃屋おほる補助／嵯峨のやおむろ著／美人乃面影 全／大阪 岡本書房發兌（絵無し）【扉】香川寶洲著／美人乃面影 全／大阪 偉業館發兌

高田本の表紙に絵があるのかどうかは不明だが、高田が前掲論文で『苦樂の鏡』と『美人の面影』の「両著は本の型式から紙質にいたるまでほとんど完全に一致している」と記しているところをみると、『苦樂の鏡』同様に絵入りであったように受け取れる（もっともこれは、高田が用いた『苦樂の鏡』が絵入りであると仮定してのことだが）。だが、そう仮定して、絵入りである杉崎本と比較すると、著者名の表記がやや異なっている。むしろ著者名の表記だけで見れば、国立国会図書館本と共通しているようにも思えるが、ほかの情報がないため、断定はできない。また、扉については、杉崎の言う「内題」が扉に記されたものだとすると、杉崎本と国立国会図書館本はまったく異なる扉を持つことになる。

高田本については、残念ながら情報が少ない過ぎるため何とも言えないが、杉崎本の表紙については、絵入りである点でも、記載されている情報が題名および「春の屋おほる補助／嵯峨のやお室著述」である点でも、まさに『苦樂の鏡』と同じ様式である。それに対して、国立国会図書館本の表紙は、絵入りでないばかりか、「偉業館發兌」ではなく「岡本書房發兌」となっている。発行者が「岡本仙助」であることからわかるように、「岡本書房」は「偉業館」の別称であり、「国立国会図書館デジタルコレクション」で調べてみたところ、岡本は明治二十一年から二十二年にかけての一時期、一部の本は岡本書房の名で刊行していたようだ。

もし、いずれかが「再版」であるならば、その際に装幀も変更されたと考えられるが、国立国会図書館本には奥付に「再版」の記載はない。また、杉崎本も「初版本」とされている。では、なぜこのような異装本が存在することになったのか。詳細はわからないが、少なくとも、国立国会図書館本の方が、初期の一時的（あるいは仮の）装幀だったと考えることはできるだろう。国立国会図書館本には、扉の部分に「東京図書館蔵」と「明治二二・四・一一・内交」の二つの印が押してある。明治八年以降、国内で出版された本は内務省へ納入されることになっていたが、そうした納入本の中で、旧上野図書館（明治二十二年当時は東京図書館）に交付されたものを「内務省交付本（内交本）」と呼び、「内交」の受入印が押されていた。<sup>21</sup>つまり、「内交」の日付が明治二十二年四月十一日であることから見ても、この国立国会図書館本は、「三月二拾四日刷成」の後、かなり早い時点で内務省へ納入されたものであることは確かだ。内務省への納入が行われた後、何らかの事情で、装幀の変更が行われたと考えることができる。理由は不明だが、奥付の著作者が「香川倫三」名義であることと関係があるのかもしれない。国立国会図書館本の扉に「香川寶洲著」とあることから考えて、当初は表紙も「香川寶洲著」として準備を進めていたのを、急に「春の屋おぼろ補助／嵯峨のやお室著述」に切り替えることになったと考えると、つじつまが合うように思う。その際、同時に『苦樂の鏡』と同じように絵入りの表紙を準備しようとしたのが、それが遅れたため、最初の製本分のみ、文字だけの簡略的な表紙になったのではないかということだ。ただし、これはあくまで表紙および扉の装幀の問題であり、本文そのものは共通のものともみてよいだろう。

なお、各刊本の価格について、わかる範囲で確認しておく、『守銭奴の肚』については、国立国会図書館所蔵



本には「定価三十五銭」の押印があるが、『東京日日新聞』には、明治二十年三月一日に「特別正価金三十銭」、同年九月一日に「新版書籍特別廉価発売」として「正価金三十銭」、明治二十一年一月四日に「正価金二十五銭」の広告が掲載されている。<sup>(22)</sup>『美人の面影』については、『苦樂の鏡』掲載の広告に「正價 金二十銭」とある。『ひとよがり』については、国立国会図書館蔵本に「原價金廿五銭」の押印があり、明治二十一年九月二十七日の『東京日日新聞』にも、「定価二十五銭」として広告が掲載されている。<sup>(23)</sup>

4

次に、本来ならば作品が発表されたと思われる新聞紙面を確認すべきところだが、先行研究で報告されていたように、『美人の面影』『苦樂の鏡』ともに、残念ながら紙面の所在そのものを確認することができなかった。また、『神經の罪』についても、同じ結果であった。<sup>(24)</sup>結局、現時点で具体的に確認できたのは、四作品の刊本から得られた情報のみということになる。ここから各作品の成立時期を絞り込むためには、作品に関係した人々の日記や回想録といったものを史料とし、考察を進めるしかない。

このような場合、一般的に最も信頼度が高いと思われるのは日記であるが、嵯峨の屋自身の日記は確認されていない。ただし、坪内逍遙については、日記に準ずるものとして、逍遙自身が筆で帳面に書きつけた「幾むかし」と題する日記の抄録が残されている。これは、杉崎も先ほどの『嵯峨の屋おむろ研究』の中でふれていたものだが、

逍遙が「明治五年から同二十二年までの主要事項を摘記したものらしく、「大正八九年ごろ」に「日記帳や書類を整理しつつ、書き綴ったもの」だろうとされている。今回、その翻刻を掲載した『坪内逍遙 研究資料 第五集』（一九七四年）<sup>26</sup>を確認することができたので、この「幾むかし」の記載をもとに、それを嵯峨の屋の回想録などと照らし合わせながら、成立時期についての考察を行いたい。

まず、「幾むかし」の中で関係する部分を抜き出すと、次のようになる。

○明治一九年

（五月） 廿三日 長谷川 矢崎来訪

廿日 此夜冷々亭主人 矢崎と共に来る

（八月） 此月より今日新聞の論説を補助す

矢崎の裏店の噂を刪正す

（欄外） 十二日 浪花新聞香川某

（十月） 同三日より矢崎鎮四郎寄寓 嵯峨のやおむろと附ける

「神経の罪」の稿を今月より今日新聞に掲載す

（十二月） 廿日 浪花新聞岡田竜吟を以て寄稿を乞ふ 是非なく諾す 金港堂主人小説の著作を依頼す 諾す

廿一日 金港堂へ嵯峨のやの稿を売る

○明治二十年

(二月) 此月より嵯峨のや大阪浪花新聞の為に「百人百感美人の面影」を寄送す、補助として特ニ執筆、一ヶ月四十円の約也

「幾むかし」に初めて嵯峨の屋(矢崎鎮四郎)が登場するのは、明治十九年の五月二十三日である。嵯峨の屋自身の回想録である「春廻屋主人の周圍<sup>27)</sup>」では、彼が二葉亭四迷(長谷川辰之助)に誘われて初めて坪内逍遙を訪ねたのは明治十九年の「秋」となっているが、この文章が大正十四年に発表された回想録であることを考えると、「幾むかし」の記載の方が信頼度は高いと思われる。おそらく嵯峨の屋は、この後の逍遙宅への寄寓の際の記憶と混同してしまったのではないだろうか。五月二十三日が最初の訪問であり、嵯峨の屋はこれ以降、逍遙宅への出入りを始めたものと考えられる。この二十三日の記載の後に、なぜか「廿日」の出来事が書かれているが、これはおそらく六月二十日のことだと思われる。「冷々亭主人」とは二葉亭のことであり、嵯峨の屋は、彼とともに逍遙宅をしばしば訪れていたことになる。

そして次に、八月の出来事として、嵯峨の屋の「裏店の噂」を逍遙が「刪正」したことが記されている。この「裏店の噂」は、すでに杉崎が前掲の著書の中で指摘しているように、翌明治二十年一月に出版されることになる『守銭奴の肚』の原型と考えてよいだろう。『守銭奴の肚』の舞台もまさに裏店であり、人々の井戸端での噂話からストーリーが展開される。嵯峨の屋は、先ほどとは別の回想録「文學者としての前半生<sup>28)</sup>」の中で、「私の小説とい

ふものを初めて書きましたが、「守銭奴の腹」（明治十九年）といふのです。これは、三馬に心酔して居る頃で、三馬を讀んだ時の感情で下等社會を主材にして書いたものでした。其頃坪内（逍遙）さんに時々小説を直して貰つて居りました」と述べていて、『守銭奴の肚』を「明治十九年」としているのだが、これはもしかすると、自分の書いた下書き（裏店の噂）を逍遙に直してもらい、作品が完成した年として記したものかもしれない。『守銭奴の肚』は、この題名に改題されたのがいつかはわからないものの、作品そのものの成立という点では、明治十九年の八月頃、すでに形を成していたと考えることができるのである。

その後、嵯峨の屋は、「坪内先生の玄關の書生となつた」<sup>(29)</sup>のだが、「幾むかし」を見ると、それが明治十九年の十月三日であったことがわかる。ここで初めて作家「嵯峨のやおむろ」が誕生する。問題は、これに続けて記載されている「神經の罪」である。もし、これが嵯峨の屋の小説であり、「今日新聞に掲載」されたとすれば、嵯峨の屋の小説の第一作は「神經の罪」ということになる。しかし、嵯峨の屋自身は先ほどふれたように、初めて書いた小説は「守銭奴の腹」だとしている。もしかすると、「神經の罪」は嵯峨の屋の小説ではないのではないか、あるいは、嵯峨の屋のものであったとしても、実際には掲載されなかったのではないかと思ひ、ほかの回想録をあたってみたが、逍遙は、昭和八年に刊行された『柿の蒂』<sup>(30)</sup>と題する随筆集の中でも、「矢崎君が宅へ寄寓して嵯峨のやおむろと名宣つて「神經の罪」を『今日新聞』に私の加筆で載せたのも、十九年の十月」と記している。もっとも、この随筆の方が「幾むかし」よりも後であり、逍遙は「幾むかし」の記録を見ながら随筆を執筆したのだろうが、自分が「加筆」した作品が誰のものであったかを間違ふとは思えない。まして、当時、逍遙は「今日新聞の論説を

補助」していたのであり、何らかの事情で掲載が取りやめになったのなら、記憶に強く残っているはずでもある。

これはいったいどういふことだろうか。さらにほかの史料を探していたところ、内田魯庵が明治四十二年に記した回想記「二葉亭の一生」<sup>(31)</sup>の中に、次のような一節があることに気づいた。

矢崎鎮四郎君を坪内君に紹介したのは矢張長谷川君であつたが、矢崎君は明治十九年の十月には處女作『守銭奴の肚』を公けにし續いて全じ年の暮れに『ひとよぎり』を出版した。長谷川君より早く文壇に立つたのである。

この一節に関して、山田博光は、『日本近代文学大系60 近代文学回想集』に収められた「おもひ出す人々(抄)」の注釈<sup>(32)</sup>において、「魯庵の誤記」とした上で、「嵯峨の屋の処女作は「神経の罪」で、逍遙の加筆をえて、明治一九年一月「今日新聞」に発表。『守銭奴の肚』は、明治二〇年一月、大倉孫兵衛により刊行」と訂正している。だが、これは一概に「誤記」として片付けてよいものだろうか。あくまで仮説だが、もし、「幾むかし」に記された「神経の罪」が『守銭奴の肚』と同一の作品だったとしたら、どうだろう。つまり、明治十九年の八月に逍遙の推敲を受けてすでに作品として完成していた「裏店の噂」が、一〇月に『今日新聞』掲載の運びとなった際に「神経の罪」と改題され、さらにそれが大倉孫兵衛により刊行された際に『守銭奴の肚』に改題されたという流れである。この仮説にもとづけば、先ほど引用した「私の小説といふものを初めて書きましたが、「守銭奴の腹」(明治十九年)

といふのです」という嵯峨の屋自身の記述も、新聞掲載の年をふまえて書かれたものとして納得できるし、これまでのさまざまな矛盾点もほぼ解決できるように思う。また、『守銭奴の肚』の刊本のデータでは、「板権免許」の取得が明治十九年十月二十二日となっていたが、『今日新聞』の掲載（連載）と並行して出版の話も進んでいたとすれば、こちらも納得のいく日付なのである。ただし、これはあくまで推測に過ぎない。<sup>33)</sup>

次に、『ひとよぎり』に目を向けてみる。「幾むかし」には、直接『ひとよぎり』という作品名は登場してこないのだが、明治十九年十二月二十一日の記録に「金港堂へ嵯峨のやの稿を売る」とある。杉崎も前掲の著書の中で指摘していたように、この部分に記された「嵯峨のやの稿」に該当する作品は、たしかに『ひとよぎり』以外には考えられない。つまり、『ひとよぎり』の原稿は、この日（明治十九年十二月二十一日）に、逍遙を介して金港堂に売られたということになる。これは、十二月二十日に「金港堂主人小説の著作を依頼す 諾す」とあり、それを受けてのことだろうが、二十日の依頼に対し、逍遙は早くも翌日に『ひとよぎり』の原稿を売っている。ということつまり、この時、すでに原稿は完成した状態で逍遙の手元があり、彼は嵯峨の屋のために、その発表先を考えていたものと思われる。しかし、実際に『ひとよぎり』が刊行されたのは明治二十年十二月である。金港堂に原稿が売られてから、刊行までに一年もの時間差が生じてしまう。杉崎はこの点を、「一年もおくら入りになった事情は不明だが、無名の嵯峨の屋の原稿は金港堂側で快しとしなかったのであろうか」と推測しており、私も、少なくとも現時点では、それと同じ考えである。金港堂が逍遙に「小説の著作」を依頼した際に期待していたのは、あくまで逍遙の作品だったに違いないのであり、嵯峨の屋の作品は、金港堂側としてはいわば当て外れであったわけであ

る。ただ、逍遙としては、自分自身が多忙な中、これから新たに自分が小説を準備するよりも、すでに手元にある嵯峨の屋の作品に出版の機会を与えようとしたのだと思われる。ただし、この点についても、真相の究明には新たな史料の発見と考証が必要である。ただ、いずれにしても、作品の成立という点で言えば、『ひとよぎり』は明治十九年の十二月中旬には完成していたと考えることができる。

## 5

四作品の内、残されたのは『美人の面影』と『苦樂の鏡』の二作だが、「幾むかし」に記録があるのは、『美人の面影』のみである。『浪華新聞』関係としては、まず、明治十九年八月の欄外に「十二日 浪花新聞香川某」とあり、同じ年の十二月二十日に「浪花新聞岡田竜吟を以て寄稿を乞ふ 是非なく諾す」とある。「香川某」とは、『美人の面影』『苦樂の鏡』両著の著作者として奥付に名前のある香川倫三のことであろう。高田知波は前掲論文の本稿引用部分で、彼のことを『浪華新聞』創立スタッフのひとりとして同社内で重要な地位を占めていた人物」としていた。『浪華新聞』は大阪の新聞社ではあるが、逍遙の小説の連載を求めて再三やってきていたものと見られる。「幾むかし」に、「是非なく諾す」と表現されていることから、逍遙がたび重なる依頼を断り切れず、やむなく引き受けた様子が読み取れる。そして、翌明治二十年の二月から寄稿が開始されるわけだが、この場合もまた、作品は逍遙自身のもではなく、嵯峨の屋の『美人の面影』であった。『浪華新聞』側では、このことをどのよう

に受け取っていたのだろうか。ちょうどこの時、東京の『今日新聞』から『浪華新聞』に移った野崎左文は、回想録の中で次のように述べている。<sup>(36)</sup>

私は明治十九年に今日新聞を去つて大阪で發行する浪華新聞（明治九年頃の浪花新聞は花の字この浪華新聞は華の字を用ひて居た）に聘せられ坂崎紫瀾氏と共に同地に赴いた。（中略）其頃東京の萬朝報が桃色の用紙を使つて居たのに倣ひ薄緑色の用紙で刷り出したのであつた。（中略）此の東京下りが物珍らしく且紙上へ嵯峨の屋おむろ氏の言文一致體の續き物を載せたので評判よく、最初の内は各商店の店頭の到る處緑色の新聞がチラ付いて居る程の賣れ行きであつた

文中の「嵯峨の屋おむろ氏」の「續き物」は、「言文一致體」としている点が気になるところではあるが、『美人の面影』以外には考えられない。期待していた逍遙の小説ではなかったものの、嵯峨の屋の小説は大阪の読者に評判がよく、紙面の売り上げに貢献したものと見える。だとすると、「幾むかし」には記載はないものの、『浪華新聞』が次作の寄稿依頼をしてきただろうことも充分に想像できる。先行研究において、高田や杉崎が推測していたように、『苦樂の鏡』は『美人の面影』に続き、『浪華新聞』に連載された可能性が非常に高いと言える。そして、そのように考えると、この二つの作品がともに香川倫三の名義で、同じ大阪の偉業館（岡本書房）から、同じ時期に揃つた形で出版されたということも納得がいくのである。<sup>(37)</sup>



以上、嵯峨の屋の初期四作品『守銭奴の肚』『ひとよぎり』『美人の面影』『苦樂の鏡』について、その成立時期を考察した。嵯峨の屋の作品の中では、やはり『守銭奴の肚』が最も早く成立した作品だと言える。刊行された『守銭奴の肚』には、逍遙による他序が付されているが、そこには次のように書かれている。<sup>(18)</sup>

我友<sup>わがとも</sup>さかのや御室<sup>おむろ</sup>ぬしは夙<sup>つと</sup>に小説<sup>せうせつ</sup>に首<sup>くび</sup>ツ文<sup>たけ</sup>はまりて而<sup>しか</sup>も溺<sup>おほ</sup>れざる堅固<sup>けんこ</sup>なる持前<sup>もちまへ</sup>さてこそ兎<sup>と</sup>もすれば才<sup>さい</sup>を吝<sup>わし</sup>みて  
まだ／＼予<sup>わし</sup>の筆<sup>ふで</sup>はおさない程<sup>ほど</sup>になど容易<sup>やうい</sup>に腕前<sup>うでまへ</sup>を見<sup>み</sup>せられざりしが竟<sup>つい</sup>に豁然<sup>くわつぜん</sup>と大悟<sup>たいご</sup>ありしと見<sup>み</sup>えて年来<sup>としらつみ</sup>積<sup>つみ</sup>  
おきのお肚<sup>なか</sup>の珠玉<sup>しゆぎよく</sup>を紀文<sup>きぶん</sup>宜<sup>よろ</sup>しくの氣前<sup>きまへ</sup>をあらはしバンバラ／＼と蒔<sup>まき</sup>はじめられたり

『守銭奴の肚』は、嵯峨の屋が二葉亭とともに逍遙宅を訪問し始めた頃に、すでに草稿ができていたのだろう。それを「裏店の噂」として、意を決して逍遙に差し出し、初めて添削を受けたのが明治十九年八月。題名は別として、『守銭奴の肚』の本文そのものは、この頃に完成したと考えられる。そして、次に成立したのが、おそらく『ひとよぎり』である。出版は明治二十年十二月であるが、「幾むかし」を見る限り、原稿は明治十九年十二月中旬には完成していた。明確な執筆時期がいつかははっきりしないが、逍遙から添削を受ける自分自身の姿がパロディー風に描かれていることから見ると、第一作の『守銭奴の肚』が形を成した後、逍遙宅への寄寓が始まった頃に書かれたのではないだろうか。『美人の面影』と『苦樂の鏡』については、まず、明治十九年十二月下旬から明治二十年二月にかけて『美人の面影』が完成し、その後、続けて『苦樂の鏡』が完成したと考えられる。草稿としては、

それ以前に存在していたのかもしれないが、逍遙の手が加えられ、新聞掲載のための作品として形を成したのは、新聞社からの依頼を承諾した後と考えてよいと思われる。

これまでの研究において、この四作品は、出版あるいは新聞紙面への掲載時期を考証することで、『守銭奴の肚』『美人の面影』『苦樂の鏡』『ひとよぎり』の順に作品も成立したかのようには漠然ととらえられ、それをもとに内容の考察や評価が行われてきた。しかし、本稿における考察の結果、成立という点では、むしろ『守銭奴の肚』『ひとよぎり』『美人の面影』『苦樂の鏡』の順で考えるのが妥当であることがわかった。もし、従来の研究のように、『ひとよぎり』という作品のみに、他の三作品よりも進歩した近代的な要素を読み取るならば、そこには単純に進歩として片付けることのできない他の要素が含まれていることを、さらに深く検討することが必要になってくる。

また、作品の出版と成立の時期を比較してみると、『守銭奴の肚』は、出版が明治二十年一月であるのに対し、成立は明治十九年の八月までさかのぼることができる。『ひとよぎり』の場合は、出版が明治二十年十二月であるのに対し、成立は明治十九年の十二月というように、一年ものずれが生じている。近代文学において、一般的な作品は、出版や新聞掲載という形で発表されることによって初めて公の目にふれることになる。しかし、嵯峨の屋の初期作品の場合は、そうした一般的な場合とは異なっている。嵯峨の屋の作品ではありながらも、そこには明らかに逍遙の手が加えられている。また、その周囲には常に二葉亭の存在もあったのである。嵯峨の屋の作品を自ら添削し、手を加える中で、それによって逍遙自身が得るものもあつたはずである。また、二葉亭が、嵯峨の屋の発表前の原稿を目にすることがなかったとも言えない。つまり、嵯峨の屋の作品が形を成す中で、逍遙や二葉亭が、嵯峨

の屋の作品から影響を受けるということもあつたのではないか。明治二十年前後の小説の実態は、実は、そのような微妙な領域において考察することでは、とらえられない要素を含んでいるように思う。

〔注〕

- (1) 杉崎俊夫『嵯峨の屋おむろの研究』（双文社出版、一九八五年二月）の瀬沼茂樹による「序」。
- (2) 石橋忍月（氣取半之丞）「舞姫」（『國民之友』第七二号、明治二十三年二月三日）。引用は、『明治文學全集23 山田美妙・石橋忍月・高瀬文淵集』（筑摩書房、一九七一年八月）所収のものに拠つた。
- (3) 嵯峨の屋おむろ（矢崎嵯峨屋）「春廼屋主人の周圍」（『早稲田文學』第三三二号、大正一四年六月）を参照。
- (4) 拙稿「嵯峨の屋おむろ「くされたまご」と「小説論略」論争（前）」（金沢大学国語国文学会『金沢大学国語国文学』第三四号、二〇〇九年三月）、同じく「嵯峨の屋おむろ「くされたまご」と「小説論略」論争（後）」（金沢大学国語国文学会『金沢大学国語国文学』第三五号、二〇一〇年三月）は、嵯峨の屋の作品を中心に明治二十年代前半の小説の状況について論じたものである。
- (5) 『明治文學全集17 二葉亭四迷・嵯峨の屋おむろ集』（筑摩書房、一九七一年一月）。「解題」の当該部分は編集部による執筆。なお、引用文中で「改造社版及び春陽堂版文學全集」として言及されているのは、『現代日本文學全集 第十篇 二葉亭四迷集・嵯峨の屋御室集』（改造社、一九二八年一〇月）および『明治大正文學全集 第四卷 二葉亭四迷・矢崎嵯峨の舎・山田美妙』（春陽堂、一九三〇年二月）のこと。取められている小説は、前者が『野末の菊』『くされたまご』『婿えらび』『初戀』の四編、後者が『初戀』『流轉』『空蟬』『つまらぬ人』『悔恨』『一劍有響落花村』の六編。
- (6) 『日本近代文學大系47 明治短篇集』（角川書店、一九七〇年五月）。
- (7) 本間久雄『新訂 明治文學史 下巻』（東京堂、一九四九年一〇月）。
- (8) 和田繁二郎『矢崎嵯峨の屋論』（『立命館文學』第一六八号、一九五九年五月）。
- (9) 十川信介『矢崎嵯峨の屋』（『國語國文』第三六卷第六号、一九六七年六月）。

- (10) 吉田精一「明治短篇集解説」(『日本近代文学大系47 明治短篇集』角川書店、一九七〇年五月)。
- (11) 中村光夫「解題」の十川信介執筆部分(『明治文学全集17 二葉亭四迷・嵯峨の屋おむる集』筑摩書房、一九七一年一月)。
- (12) 杉崎俊夫執筆・項目「嵯峨の屋おむる」(『日本近代文学大事典 第二巻』講談社、一九七七年二月)。
- (13) 本稿における各作品の題名の表記は、他文献からの引用部分については元の文献の表記に従って記載するが、そのほかの部分では、本論で後ほど判明することになる各刊本の内題(巻首題)に従い、角書きは省略した形で表記することにする。なお、刊本あるいは発表紙面が確認できない作品については、原則として旧字・旧仮名遣いで表記する。
- (14) 高田知波「嵯峨のやおむるの作家的出発——『無味気』の前後——」(『東京大学国語国文学会『國語と國文学』第五六卷第九号、一九七九年九月)。
- (15) 高田はこの点に関し、「注」の中で「明治二十年度前半の『浪華新聞』は所在が不明であり、実物を閲覧することのできた同紙の九月以降の分には、『美人の面影』も『苦楽の鏡』もともに掲載されていないので、私の推測は仮説の域内にとどめざるを得ない」とことわっている。なお、高田は引用文中で「『美人の面影』の方が二年前(明治二十年)に大阪の『浪華新聞』に連載した小説の単行本化であることが嵯峨のや自身によって明らかにされている」としているが、これは、和田繁二郎も(8)の論文の本稿引用部分で取り上げている「嵯峨の屋自記の年譜(改造社版現代日本文学全集)」にもとづく記述と思われる。
- (16) 高田は『神經の罪』については、この論文の「注」の中で「現在までのところこの『神經の罪』という作品は存在が確認されていない上に、嵯峨のや自身が自分の処女作は『守銭奴の肚』であると繰り返し語って」いることなどから、「嵯峨のやの処女作は『守銭奴の肚』であるとしておきたい」と述べている。
- (17) 杉崎俊夫「嵯峨の屋おむる研究」(『双文社出版、一九八五年二月)。
- (18) 『神經の罪』については、「現在当該紙を確認しえない」としている。
- (19) 坪内逍遙自選の日記抄録。本論の後半で詳細な説明を行う。
- (20) 山本良は、その著書『小説の維新史——小説はいかに明治維新を生き延びたか——』(『風間書房、二〇〇五年二月)の

第八章「氣質にかわるもの——『二読三嘆 当世書生氣質』以後——」において、嵯峨の屋の作品として『ひとよぎり』と『美人の面影』を取り上げ、『ひとよぎり』は「まちがいがなく氣質物の形式を踏襲したといっている」作品であるのに対し、『美人の面影』は「氣質物に接近しながらも、そこから離反しようとする傾向が示されている」と評価している。ただし、その成立時期については特に問題としていない。

(21) 国立国会図書館のウェブサイトに「リサーチ・ナビ」を参照。

(22) 国文学研究資料館「明治期出版広告データベース」で確認。

(23) (22) に同じ。

(24) 東京大学大学院法学政治学研究科附属近代日本法政史料センターの「明治新聞雑誌文庫」を調べたところ、『浪華新聞』は、明治二〇年については八月までは所蔵がなく、九月についても欠号が多い。また、『今日新聞』は、明治一九年については五月一日までと十一月六日のみの所蔵となっている。

(25) 「幾むかし」を翻刻した大村弘毅による解説。(26) の『坪内逍遙 研究資料 第五集』に掲載されている。

(26) 大村弘毅翻刻「逍遙日記 幾むかし——逍遙自選日記抄録——」(逍遙協会『坪内逍遙 研究資料 第五集』一九七四年五月)。

(27) (3) に同じ。ただし、引用は『明治文學全集17 二葉亭四迷・嵯峨の屋おむろ集』(筑摩書房、一九七一年一月)所収のものに拠った。

(28) 嵯峨の屋おむろ(嵯峨の屋主人)「文學者としての前半生」(『文章世界』三巻七号、明治四二年七月)。ただし、引用は『明治文學全集17 二葉亭四迷・嵯峨の屋おむろ集』(筑摩書房、一九七一年一月)所収のものに拠った。

(29) (27) に同じ。

(30) 坪内逍遙『柿の蒂』(中央公論社、昭和八年七月)。

(31) 内田魯庵(魯庵生)「二葉亭の一生——回顧二十年——」(坪内逍遙・内田魯庵編『二葉亭四迷』易風社、明治四二年八月)。

(32) 『日本近代文学大系60 近代文学回想集』(角川書店、一九七三年二月)所収の内田魯庵「おもひ出す人々(抄)」の注釈。

「二葉亭の一生」は明治四十二年の初出後、大正三年の著者自身の改稿を経て、最終的に魯庵の回想録『おもひ出す人々』（春秋社、大正一四年六月）に収められたが、本論関係部分の書名および出版年月は変更されていない。

(33) 和田繁二郎が(8)の論文で「嵯峨の屋日記」としていた「年譜」(『現代日本文學全集 第十篇 二葉亭四迷集・嵯峨の屋御室集』改造社、一九二八年一〇月)には、『神經の罪』は記載されていない。『守銭奴の肚』については、十九年に「十一月、處女作『守銭奴の肚』坪内氏の助力にて發表の運びとなる。(二十年一月出版)」と記載されている。

(34) (17)に同じ。

(35) ちなみに、本稿に引用した魯庵の回想記には、「續いて全じ年の暮れに『ひとよぎり』を出版した」とあった。これは魯庵の記憶違いであろうが、気になる点ではある。魯庵の記述のとおりに読めば、『ひとよぎり』の出版は明治十九年の「暮れ」ということになるが、それはちょうど、『ひとよぎり』の原稿が金港堂に売られた時期と符合しているようにも思えるからである。明治十九年の「暮れ」に何らかの形で『ひとよぎり』が公にされたのだろうかとの疑いも生じてくる。

ただし、「年譜」(『現代日本文學全集 第十篇 二葉亭四迷集・嵯峨の屋御室集』改造社、一九二八年一〇月)には、明治十九年十二月は何も記載がなく、明治二十年に「十二月、『ひとよぎり』を金港堂より上梓」とある。

(36) 野崎左文『私の見た明治文壇』(春陽堂、昭和二年五月)。

(37) 高田知波は(14)の論文の中で、『浪華新聞』が明治二十一年十一月に廃刊されたことにふれているが、『美人の面影』と『苦樂の鏡』が明治二十二年三月にほぼ同時に出版されたのも、それと関係する事情があるように思われる。

(38) 嵯峨の屋おむろ『守銭奴の肚』(大倉孫兵衛、明治二十年一月)。引用は架蔵本に拠る。